



武田泰淳全集

第十三卷

筑摩書房

武田泰淳全集 第十三卷
昭和四十七年三月二十五日 第一刷発行

著 者 武 田 泰 淳

発 行 者 竹 之 内 静 雄

発 行 社 株式会社 筑 摩 書 房
東京都千代田区神田小川町二ノ八
電話 東京(五)七六五一(代表)
振替 東京 四 一 二 三
郵便 番号 一〇一 一九一

印刷 株式会社 三 松 堂
製本 和田製本工業株式会社

〔分類〕 0395 (製品) 72413 (出版社) 4604

武田泰淳全集

第十三卷

第十三卷 目 次

政治家の文章	3
今年の文学抱負	105
しろうと批評とは何か	106
江口渙著『三つの死』	108
「白色婦人」と黄色男子	109
ヘルマン・ブロッホ著『罪なき人々』	112
日本人の顔	113
仏教と文学	114
反思家家の返事	116
物語の新しい航路	120
戒名と兵隊	125
戦術としての批評	128

微小な存在	134
動物・植物・鉱物	136
古典の再評価	138
メーデー見聞記	141
神話について	146
『火の接吻』あとがき	151
小説家としての武者小路氏	153
愉快な社会主義者・山本健吉	158
高橋義孝氏について	159
『敵の秘密』あとがき	163
黒い掌	165
三島由紀夫『小説家の休暇』	166
堀田善衛	167
悪徳について	169

楽しきかな食堂	181
大文学と取組め	182
サルトル著『ユダヤ人』	183
X氏との対話	184
女神と泥人間	194
読まれるということ	196
「快樂論争」について	197
品行方正な背徳	203
癡者の生活から生れた四書	209
埴谷雄高論	211
私と共産主義	216
吉川英治論	221
あの頃この頃	229
寺田透著『同時代の文学者』	230

ものやわらかな人	234
梅棹忠夫著『モゴール族探検記』	236
小説の怪物性	237
カミュ著『転落』	242
証言はすべての人間に重要	243
ぼくと上海	244
兎の耳と鼠の歯	246
『みる・きく・かんがえる』はしがき	248
東海村見物記	249
生き残りの感慨	260
あさって会	264
好色一代男	265
魔術師になるな	268
駒田信二著『石の夜』	270

イギリスの知性・人間の野性	271
植物より花屋さんへ	273
堀田善衛著『インドで考えたこと』	275
科学と文学	276
榆の樹蔭の欲望	280
限界状況における人間	282
人間をささえるもの	293
日本の信仰	302
顔見世大歌舞伎	303
芸術座「風雪三十三年の夢」	304
新宿末広亭にて	306
『檀山節考』以上！	307
社会科学者と文学者	308
中村光夫作『人と狼』	311

どこにでも、何回でも	312
私のひとりごと	313
中国歌舞団	317
感想	318
応挙から学ぶべきもの	319
「助六」の物理作用	323
幸田文学のおもしろさ	324
『現代の魔術』あとがき	327
『土魂商才』あとがき	327
サーカスの演出	330
気はやさしくて力もち	331
何事も、ながい目で	332
思いつめる	333
原子へ還る	334

庶民の泣き笑い	335
国民ぐるみ	337
仙人はどこにいる？	338
おまわりさんよ	339
いまどこにいる？	340
しずかに決心しよう	341
いろいろな大学生	342
ほめる専門の八方美人	343
うつされたがる	344
わかりやすい？	345
道徳的なりや否や	346
歴史と文学	347
庭はどこにでもある	354
あのころの楽しみ	355

日本は進歩しつつある	356
魯迅と中野重治	358
文学者と政治家	359
合同公演「関漢卿」	363
見直そう「北海道」	365
『地下室の女神』あとがき	367
岡本太郎著『黒い太陽』	368
ロブグリエ著『嫉妬』	369
PRあるいはCM的自伝	370
諸行無常のはなし	377
書き歩き一週間	386
堀田善衛著『上海にて』	388
新しき「三人姉妹」の悲哀	390
冒険すべき企画	394

竹内好の孤独
.....
394

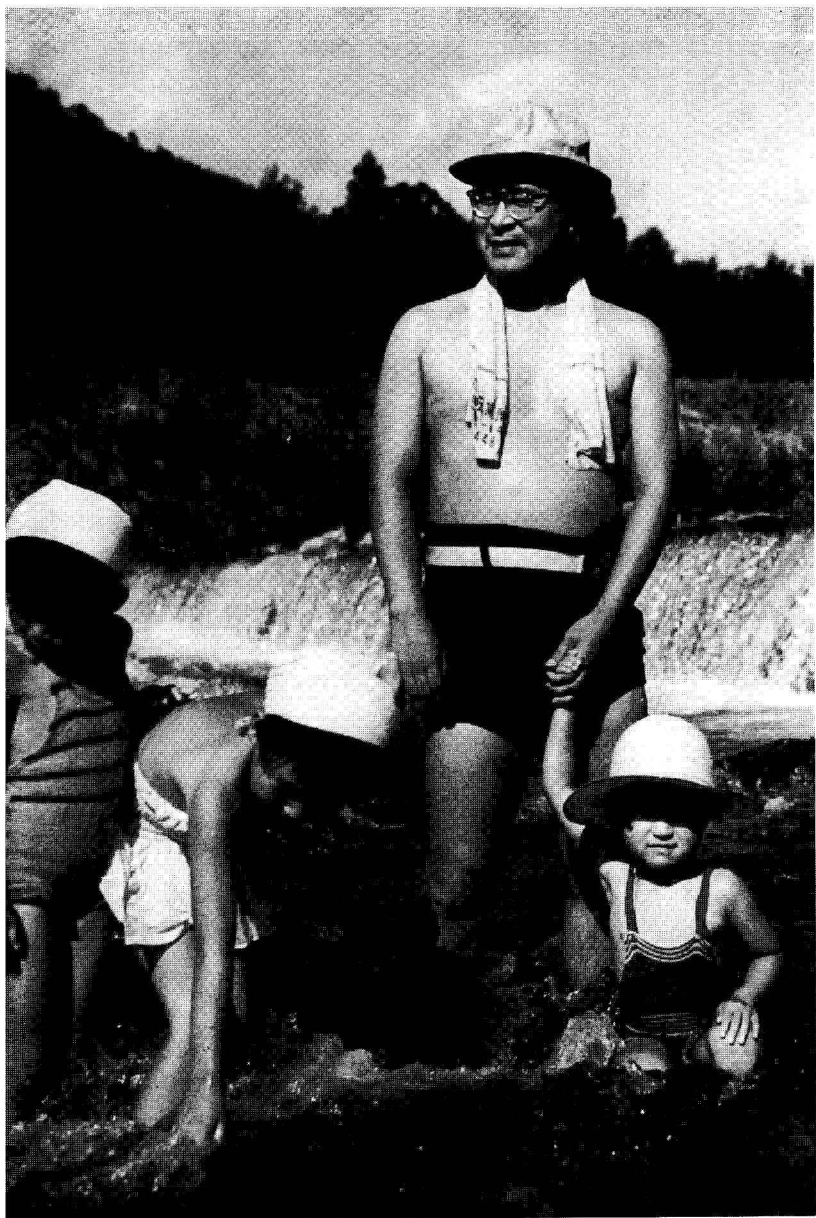
解説
.....
桶谷秀昭
397

解説
.....
409

評

論

3



信州角間温泉にて 昭和二十九年（四十二歳）
右は長女花（三歳）、左の二人は竹内好氏令嬢
本文 229 ページ下段参照

政治家の文章

I 「政党政派を超越し

たる偉人」の文章

「光輝ある三千年の歴史を有する帝国の運命盛衰は繋りて吾一人にある。親愛する七千万同胞の榮辱興亡は預りて吾一身にある。余は此の森嚴なる責任感と崇高なる真面目とを以て勇往する。余は進取、積極、放胆、活潑、偉大の精神意気を以て驀進する。世態人情の趨向は余に此の決意を一層鞏固ならしめたり。」

これは陸軍次官、宇垣一成が大正十三年、一月一日、年頭の決意として日記に書きしるした文章である。

おそらく、鷗外も漱石も荷風も龍之介も、このような文章は書けなかったであろう。ぼくらの先輩の文学者には、この種の自信はなかった。むしろ宇垣のここに示した如き

自信が持てなかったこと、それが彼らが文学者となった出発点であった。彼らには、このような文章の書けるはずはなかった。どのようなことがあっても書けない、書きたくない、書いてはならぬという自覚と信念があったればこそ、彼らは、全く別種の文章を書きつづけることができたのである。

「日記」は、公開の文書とはちがうのであるから、他人の眼を警戒して体裁をつくらう必要はない。最近発表された、漱石の日記の一部などは、家族に対する冷たい批判が、いざだった神経のするどさをむき出しにして、痛ましいほどである。あれくらい自己を忠実に語っている、無類の自覚者であった漱石にして、なお秘蔵の日記だけにしかぶちまけられない「真実」があった。真実の自己をいちいち、一般国民や仲間の競争者にさらけ出しておくわけにはいかない、政治の上層部に位していた宇垣のことであるから、さだめし公開された彼の言論とは異った調子の告白なり、詠

嘆なりが含まれているであろうと予想されるのに、彼の日記には、あまりその気配が見うけられない。

これは何も、宇垣が「日記」においても嘘をついている結果、そうなったのではない。彼はあくまで天地に恥じざる正直者が、裏も表もなく、堂々たる文章を書きつづけていると、信じてうたがわないう結果、こうなったのである。

おそらく漱石の眼からすれば、宇垣は、一度も真実の自己を語ったことのない男であろう。しかし宇垣自身に言わせれば、自分は公開の文書においても、ましていわんや秘蔵の手記においては、自己を語って誤りなかったと信じているにちがいない。

「光輝ある三千年の歴史を有する帝国」という、きまり文句を何のこだわりもなく書き記したとき、彼は決して、それが「きまり文句」であるから、あるいはそう書いておきさえすれば安全無事だからと判断して、この言葉をえらんだけではあるまい。彼の「森厳なる責任感と崇高なる真面目」が、なんの矛盾もなく、「帝国」や「光輝」と結びつくことができるという「偉大の精神意気を以て」、一字一句を書き記したのである。文章なるものが、それを書く者の全身の「榮辱興亡」を決する一つの重大な鍵であることを、ぼくらの先輩文学者とは比較にならぬ、浅い自覚ではあったにせよ、彼は彼なりに、おぼろげながら感じとっ

てはいたのである。国会における陸軍大臣の答弁のちょっとした言いまわし一つで、内閣がつぶれかかる実情には、もっともくわしい権力者の一人なのであるから、かつての在郷軍人会長が出征兵士を送り出すさいの、あの無邪気な無責任さ、瞬間的な興奮のかわりに、かなりぬけ目ない永つづきする計画性なしでいたはずはない。

いな、むしろ宇垣流に言えば、自己の文章の責任を、おぼろげながらにしか感じとっていないのは、文学者の方であつたはずである。「世態人情の趣向」を、もっともよく知悉しているのは彼であり、それ故、彼自身こそ、唯一絶対の自覚者であると考えてはばからなかった。

さまざまな象形文字を、粘土や石壁や銅器、鉄器に彫りつけていた原始時代から、文章を書きしるす人間は、すべて自覚者であつた。「文学者」だけが、自覚者であつたわけではない。その意味では、「日記」を書きしるす陸軍次官（やがては、陸軍大臣、朝鮮総督となる強力者）が、頭のハッキリした自覚者であることはまちがいない。

宇垣流に解釈すれば「光輝ある三千年の歴史を有する帝国」も、漱石風に考察すれば、人間（したがって日本人）のエゴイズムの持続にすぎなかった。

同時代の仲間（ことに政治の上層部）のエゴイズムについて、宇垣は一小説家、一大学教授よりはるかに広範囲に